情報社会と自己組織性

今田　高俊

今日は，今田です．本日はシンポジウムにお招きいただきまして，ありがとうございます．このためにご苦労いただいた札幌学院大学の先生方に感謝申し上げます．今日の私の報告は「情報社会と自己組織性」というテーマでお話させていただく予定ですが，まずはじめに，情報社会の位相を私なりに押さえておきたいと思います．

Ⅰ．高度情報社会のパラダイム

1973年に石油危機が発生し，先進産業諸国は大騒ぎになりました．国際経済が揺らぎ，産業社会はかつての「黄金の60年代」と呼ばれた時代のように順調には行かなくなった．これから先どうすればいいか．こうしたらいいのじゃないか，ああしたらいいのじゃないかということで，閉塞状況を突破して先へ進む状況にはならなかった．70年代はよく「不確実性の時代」と形容されますが，70年代を通じてかつての成長神話はもう終わったという雰囲気が高まりました．そして，何とかこの閉塞状況を突破して，新たな展開を切り開こうと世界各国が望んでいた．

そのときに，高度情報技術によって閉塞状況を突破できるのではないかということで，高度情報社会のパラダイムが華々しく登場いたしました．思い起していただくとわかると思うのですが，高度情報社会のテーマがマスコミを賑わすようになったのは1980年代に入ってからであります．

1980年代の前半，特に81年，82年頃はマイクロエレクトロニクス技術，産業ロボット，ファクトリー・オートメーション，オフィス・オートメーションなどが，連日のように新聞・マスコミを賑わし，これで閉塞状況を突破できるに違いないという楽観的な雰囲気が支配的になりました．ところが，2～3年するとあまり騒がれなくなった．それは高度情報社会のパラダイムが社会に浸透したからなのか，それとも，あんなに騒いだけれども，突破のためのパラダイムとしては期待した以上のものではないことがわかったためなのか定かではありませんが，そういう状況になった．そして，80年代後半にはバブル経済に舞い上がり，話題はそっちのほうに移って，高度情報社会はどうなるかに関してあまりきちんとした議論が展開されないまま現在に至っていると思います．

私自身は，1980年代に入って登場した高度情報社会の特徴は3つあると思っています．第1は，当たり前のことですが，社会に流通する情報量の増大です．この傾向は，80年代の高度情報技術とは関係なく，以前から続いていたのですが，高度情報技術の登場によって飛躍的に高まりました．第2は，情報量の増大に対処するために自動情報処理の技術が高度化したことです．手間暇かけて，マニュアル処理をしていたのでは追い付かないということで，コンピュータを使った自動情報処理が飛躍的に高まりました．第3は，単に自動情報処理で効率化するだけではなく，コン

Takatoshi IMADA　東京工業大学

ピュータをネットワーク化して広域的な情報処理が目指されたことです．この3つ，つまり，「情報量の増大」と，それに対処するための「自動情報処理」と「情報ネットワーク」が，80年代に進んだ情報化の大きな特徴です．要するに，社会の効率化をシンボル面で徹底化することが一番のねらいだったことです．結局，社会で進んだのはそうしたことだと思います．

近代社会はモノの処理に関する技術を高度に発展させてきました．それからヒトの処理，経営管理のノウハウもかなり進みました．それに比べてデータとか情報，シンボルの処理に関してはなかなか進まなかった．グーテンベルクにより活字印刷技術が発明されて以来，それほど飛躍的に進んだわけではなかった．ところが，コンピュータがパーソナライズされ，情報通信ネットワークが作られることによって，データ，シンボル面でも効率的な処理がおこなえるようになり，ヒト・モノ・データ（情報）の3点で，効率化が徹底するようになった．つまり，高度情報化は，近代社会を極めた状態を作るための現象であると考えていいのではないか．そう押さえることによって，どこに問題があるかをはっきりさせることができると私は考えています．

ところで，情報社会論は1980年代になって初めて出てきたわけではありません．60年代にも，大衆社会論との関連で情報社会について大いに議論されました．情報洪水や人間疎外などが議論されましたが，60年代の情報社会論の特徴はまず第1に，大衆社会状況のなかで起きたこと，第2に，マスコミュニケーション（大量伝達）が中心であったこと，第3に，情報のコミュニケーションが一方向的だったことです．これに対し，80年代の情報社会は，マスコミという大量伝達ではなくて，パーソナルで双方向のコミュニケーションに焦点をあて，大衆社会というよりはむしろ分衆社会に対応したものです．ですから，60年代とは位相が随分変わっている．

こうした新たな情報社会の位相から，新しい社会が開けるのではないかという議論が数多くなされています．産業社会の閉塞状況を突破して，新しい未来社会をもたらすのではないか，という楽観的な期待を込めて述べられたりします．私自身は近代社会ないし近代文明が1980年代に曲がり角に直面したという認識を持っています．この状況は高度情報化で突破できるものではなく，高度情報化は文明変化の触媒作用になるものだと理解しています．情報技術そのものが新しい文明を立ち上げるというようには考えておりません．むしろ，それは近代を完成に導く技術だろうと思っています．

II．文明的スケールの変化

近代社会は未完のプロジェクトで，まだなすべきことは沢山あります．ハーバーマスが言うように，近代とは未完のプロジェクトであり，まだ近代の理念は十分に実現されていません．近代は産業革命以来誤った方向に進んできたから，もう一度正しい方向へ向けてその完成を目指さなければならない，という議論もあるわけです．近代はまだ未完成だという考えに私は賛成ですが，だからといってこれからもずっと近代の完成を目指して努力をしなければならない，というのは本当かなという気がします．

翻ってみれば中世から近代が立ち上がってくる時に，中世が完成して，もうこれでデッドロックだから，明日から近代に移るというように変わってきたわけではない．中世がピークに達したとき，すでに次の社会，近代を立ち上げる動きがいろんなところで出ておりました．まずルネサンスです．ルネサンスは人間観の組み替え，神の支配下にあった人間を人間の手に取り戻すということでした．これは感性レベルでの中世の問い直し，新し

い近代の人間像を作るという形で起きました．続いて宗教改革が起きました．それからしばらくすると大航海時代によりフロンティアが開拓された．それから科学観の革命が起きました．デカルトからニュートンに至る間に科学観も問い直された．

それでも近代への転換は完成せず，新たな人間観と科学観に基づいて社会を組み立てるとすればどうすればいいか，という形で社会観の問い直しが進められた．ホッブズの問題提起に始まり，ルソーやモンテスキューを経てアダムスミスに至る努力でようやく近代の社会観が組み立てられました．それでもまだ近代社会は立ち上がらなかった．近代社会を引っ張っていくテクノロジーが必要でした．産業革命が18世紀後半に起きて，ようやく近代の構図が完成し，そのあと突っ走ってきたわけです．中世から近代へと文明が変態するのに4世紀余かかっているのですが，この4世紀余の間は大きな「ゆらぎ社会」でした．

中世的なものと近代的なものが入り交じって混沌とした状況にあり，そのなかから近代社会が立ち上がってきたと考えられます．したがって文明的なスケールの変化が起きるためには，人間観の問い直し，科学観の問い直し，社会観の問い直し，さらにテクノロジー革命が揃う必要があると思います．

この観点から見ると，高度情報化は次の文明のテクノロジーになっていないと思います．次の文明を支えるテクノロジーは情報科学と密接な関連を持ったバイオテクノロジーでしょう．バイオテクノロジーは機械文明と決定的に発想方法が違う．機械のように与えられた課題を処理するのではない．バイオというのは生きている生命体ですから，常に自然のなかにあって，自然とともに生存します．こういうバイオテクノロジーによって，次の新しい文明は担われると思います．

それから，人間観に関してはニュー・ルネサンスという形でポストモダン論が出ています．日本の悪いところですが，近代を超えて先にあるものということでポストモダン論が流行りましたが，実質的な議論がなされないまま流行が終わり，もうポストモダンは古いという形で，マスコミで話題にならなくなっています．ですが，今こそきちんと議論を詰めることが必要です．ポストモダンとは何かという定義すらきちんとしていなくて，近代のあとにあるもの，近代的なロジックに収まらないものというネガティブな内容しか与えられていない状況です．これからきちんと理論的に詰める必要があると思います．

科学観に関してはニュー・サイエンス，正確にはニュー・エイジ・サイエンスという形で，その兆しが出てきておりますが，まだまだオカルトじみた状況であります．フリッチョフ・カプラのタオ自然学（中国の道教と結びついた物理学）とか，スーパーネイチャー論とかに，私はついていけないのですが，そのなかでゆらぎの科学や自己組織性の科学など広い意味でのニュー・サイエンスの仕事も現れております．この分野はプリゴジンやハーケンによる散逸構造論やシナジェティクスなどノーベル賞級の仕事がすでに出ています．おそらくこういう分野から次の時代の科学観が広がっていくと思います．

これから，人間観も問い直されるでしょう．その方向性はぼんやりとですが見えてきたように思います．科学観の問い直しに関しては，ゆらぎや自己組織性を扱う方向で進むと思います．テクノロジーもこれからバイオテクノロジーの発展が著しく進むでしょう．

これらに対して社会観の方は，議論が皆無の状態です．これから初めの一歩がさまざまな形で議論され，模索されることになるでしょう．かつて中世から近代への転換のように4世紀余もかかると思いませんが，少なく見積もっても1世紀はかかるのではないかと私は考えています．そういう試みが今後21世紀にかけて起こり，現実社会は新しいリアリ

ティと旧来のリアリティが入り交じって混沌とした状況になると考えます.

そこで，混沌の力をどう見抜くかが問題になります．これまで混沌は社会にとって望ましくないもの，余計なもの，できれば制御して正常な均衡状態へと戻すべき対象と考えられてきました．また，近代科学はそのような方向で整備されてきました．ゆらぎとかカオス（混沌）は認識対象としては非常に興味ある現象でしたが，それを捉える分析装置がない状況では，それらを受容することは科学者としては不謹慎なため，禁欲してきました．ゆらぎが大事だといっても，その先の議論ができない．そうした状況では，ゆらぎとかカオスとかいっても空手形を切ることになるから，科学者は禁欲したのです．しかし，最近ではゆらぎやカオスを科学的に取り扱う立場が台頭しました．これからはゆらぎとかカオスを本格的に扱う議論や研究が進むでしょう．

要するに，私は高度情報化を契機として，21世紀いっぱいかけて，文明的なスケールの変化が起きることを主張したいのです．高度情報化のエッセンスが，自動情報処理とネットワーク化で社会を効率化し合理化することにあるという話では，「だから，何なの」ということになる．高度情報化が触媒作用となって次の新しい文明を立ち上げるという発想が必要なのです．

III．近代性のゆらぎ

私は1980年代の高度情報化を，主として効率化・合理化をシンボル面で進めるものだと考えていますが，現実の社会はそれだけではすまなかった．80年代，高度情報化と平行してさまざまなことが起きました．80年代は個性化・多様化の時代としばしば形容されますが，現実的にそういう状況が起きています．しかし，この「多様化の時代」というのがよくわからない．何をもって多様化というのか，何をもって個性化というのかはっきりしないまま，マスコミやジャーナリズムで多用されました．たぶんその原因になっているのは，従来の社会を捉えるモデルがうまく機能しなくなったことです．それをネガティブにではなく，ポジティブに評価すると多様化になり個性化になるということでしょう．従来の発想法でうまく把握できないものが出てくると，それは個性化だから，これは多様化ですねというような形で用いられることが多くなったのです．

既存のフレームワークというか社会の仕組みを捉えるモデルがうまく機能しないから，そこからはみ出したものを見て多様化・個性化だと安易に表現する状況だったと思います．1980年代は一方で情報化が進むと同時に他方で従来の産業社会の枠組みが有効に働かない状況がもたらされました．それは近代性のゆらぎという状況だったと思います．なぜそういうことを言うかというと，80年代になって近代化（modernization）や近代主義（modernism）という言葉を使った本が，ほとんど出版されなくなったことです．外国の文献を見ると近代化論や産業化論というタイトルの本がほとんど出ていない．近代を扱っても近代性（modernity）という言葉に変わっている．この用語転換は微妙に時代の雰囲気を反映しています．これは近代とは何だったのかという問い直しの意識を反映していると思います．日本でも近代化論は80年代以降，学術書としてほとんど見られなくなっています．後発社会の近代化というテーマはありますが，先進産業社会の行方を考える書物には近代化という言葉はほとんど使われなくなった．

それから1980年代に起こった思想状況ですが，まず新保守主義が80年代に力強い説得力を持ちました．俗にはレーガン政治，保守政治という形で紹介されていますが，そのよ

うな保守主義の社会哲学が影響力を強めました．これは近代啓蒙思想に対する懐疑という側面を含んでいます．これまで，社会は制御し，管理し，計画すれば望ましい方向へ向かうと言われてきたわけですが，新保守主義はその行きすぎに対するチェック機能を果たしました．それは遂行的行為（perfomative action）――計画的･合理的に行為するのではなくて，思いついたことをいろいろ試みる――によって作り上げられる自生的秩序（spontaneous order）を再評価し，近代の啓蒙思想，計画・管理思想に対して異義を申し立てます．また，ポストモダニズムは近代の機能主義理性の行きすぎに対する反省を問題提起しています．興味深いことに，新保守主義とポストモダニズムは，本来は思想的には相容れないはずなのですが，80年代には奇妙な同居が成立し共同戦線を組んでいる．喧嘩しなかったのはなぜか．共同戦線を組めるところは唯一，近代に対する懐疑，行きすぎた近代主義に対する懐疑なのです．

そこで私が考えている近代性のゆらぎというフレームワークを話しておきたいと思います．近代の本質とは効率性と合理性を重んじる機能優先の社会づくりを進めることである，と私は定義します．近代の特徴として官僚制化，民主主義，産業主義，技術主義など，さまざまな特徴をあげることができますが，一言で定義すればこのようになると思います．このなかには，官僚制化，技術主義，産業主義も入ります．唯一，民主主義が入らないかのように思われますが，これも入る．これまでの民主主義は機能主義の論理であらかた説明できるからです．機能主義の論理から言えば，効率と合理性を重んじるために効率的な人材登用，資源配分をする必要があり，属性主義的な家柄とか身分に従っての処遇は排除されるはずで，機会均等は機能主義の論理のなかに含まれます．ところが，現在の社会は，機能の発想ではもはや社会は成り立っていかないところに位置するようになっていると思うのです．

機能主義とは，理論的には，コントロールによってパフォーマンスを確保する，制御によって成果を高めるという発想です．機能主義はそのような論理ではないという意見もあります．機能要件とその充足を柱とする理論であるという考えがありますが，これは説明の論理ではありません．トートロジーカルな目的論です．私は，トートロジーや単純な目的論は科学理論でないと思います．サイバネティクスを見ればわかるように，目的論の科学的説明構造はコントロール・パラダイムであります．機能主義を整理すればコントロール論になる（はず）．また，パフォーマンスは成果のことですから，機能的な要件領域の成果がどうあがっているか，例えば，経済の成果がどうあがっているか，政治の成果がどうあがっているかを記述する枠組みになります．社会指標論は機能による社会の記述と言えます．

近代システムは理念的には，構造という発想と機能という発想のループとして位置づけられてきました．構造とはルール（規則）によってパターン（型）を生成するという発想です．ルールでパターンを生成するだけでは近代になりません．環境変化に対して効率的に適応するという発想がそこにはない．構造だけにこだわれば，むしろそれは中世的だろうと私は思う．ルールに基づいたパターン維持は中世的発想です．

構造の発想に加えて，環境変化に効率的に適応できる発想を社会的なレベルで組み込んだのが近代です．こうして近代社会は構造と機能のループで社会の発展を導いてきたわけです．ところが現在，性能や品質を超えたシンボリックな意味，つまり象徴性，遊び性，フィーリングだとかさまざまな形で表現されるものが付け加わりつつある．このように情報化は機能を超えるものをどんどん作り出し

ています．また，これらは構造にもなっていない非構造的なものです．超機能的（trans-functional）で非構造的な（non-structural）な領域が重要な社会的関心事となってきました．そこは構造と機能の枠組みではお手上げの領域で，それでは処理できずはみ出してしまう領域ですから，ゆらぎになるのです．

ゆらぎは象徴的な意味の問題が現れたことにその原因があると私は考えています．意味というのは昔からある問題ではないかとよく言われます．確かにそうです．中世には，聖なるルールによって支配された，つまり構造化された意味がありました．近代でも，役に立つ，有用であるという機能化された意味がありました．これらは機能や構造に従属した意味でありまして，意味独自のメカニズムを持った意味ではない．意味の意味というか，意味のメカニズムの固有性を必ずしも持っていなかったと思います．この意味が自己主張を始めたのです．ですからこの象徴的意味のメカニズムを解明することがこれから重要になる．意味によるゆらぎを通じた自己組織化が焦点になると考えています．

Ⅳ．自己組織性と意味情報

私は自己組織性というテーマと十数年取り組んで，ようやく1986年に本にまとめることができました．出版したタイミングが良かったせいもあると思いますが，それ以来皆さんから自己組織性についてスピーチや原稿の依頼を受けるようになりました．

私は自己組織性パラダイムの特徴について，しばしばメタファーで表現することにしていますが，それは哺乳類的な発想ではなくて，昆虫類的な発想であると考えます．昆虫類は変態（メタモルフォーゼ）をします．昆虫は卵から孵化して青虫になり，成長をする．ところがある程度成長するとサナギになって，動かなくなる．環境も蓑によって遮断します．蓑のなかで青虫を作っていた体細胞をスクラップし，成虫の形を作る新しい体細胞をビルドします．そして，うまく脱皮し，変態できれば，例えば蝶になる．このとき環境への適応は第一級のテーマではなく，自分で自分を変えることをおこないます．こういう意味で自己組織的なのです．サナギのなかをビデオで見たことがあるのですが，まず，どろどろになります．黒っぽい，どろどろのカオス状態になる．古い体細胞をいったん溶かしてしまう．それから徐々に新しい体細胞が形成されます．

これはあくまで例えですから突っ込まれると困るのですが，蝶はひらひらときれいな色をして飛び回ります．人間には遊んでいるように見える．けれども，きちんと子孫を残す繁殖行為をやってのける．遊びのなかに再生産行為が入り込んでいる．蝶は人間のようにモノを生産しませんから，彼らの仕事は種の再生産活動だろうと思うのですが，それを立派にやっている．こうした行動は，成長・発展という論議では捉えられないものです．今，産業社会も1980年代からこういう状況に入っていると考えます．おそらく1世紀くらいかけて別の新たな文明社会へ変態するでしょう．蝶のようにただ再生産行為だけやっているということにはならないでしょうが，少なくとも従来の産業社会とは随分違った社会が，21世紀いっぱいかけて，もたらされると思います．

(1) 情報とは何か

ところで，意味の問題，特に情報とのかかわりで言えば意味情報という問題ですが，それがどのようなメカニズムで動くのかが，まだはっきりわかっていません．従来のシャノン流の情報の定義に従えば，不確実性を半分に減らすのが1ビットの情報量になります．不確実性を減らすとは，システムにとって意志決定効率を高めることです．情報量が多い

ということは，システムの意志決定能力を高める，不確実性を減らすことができるということです．そしてこれがコントロール理論と結びついたのです．このように捉えられた情報は機能情報であります．これ以外に構造情報もあり，それはルールにしたがってパターンを作り出す情報です．しかし，意味情報とは何かという定義がまだきちんとできていない．

ソシュールが一般言語学講義で定義した記号の定義は，記号とは差異であるということです．差異が意味の素であります．また，インフォーメーション（information）とは，フォーメーション（formation）をイン（in）することです．形を取り込むことです．形ができるためには違い（差異）がなければならない．つまり，情報とは形を取り込む，違いを取り込む，ということになります．

日本語で情報とは情に報いることです．情緒的，感性的なものになります．中国語では「息信」と書いて情報になります．相手の息遣いを信用するという意味ですから，これもかなり情緒的，感性的な感じがあります．西洋と東洋を混ぜて言えば，情報とは違いを取り込み相手と心を通わすことだと考えられます．これがまさに意味情報を考える上で重要です．不確実性を減らすだけが情報ではないということです．

意味に関連して，従来の情報理論ではお手上げの分野を１つあげてみましょう．人工知能を作る場合，機能的な情報の発想ではうまくいきません．私は理工系の大学にいますから，情報学科の先生方と話しをすることが多いのですが，「意味情報を処理したいのだが，どうも機能的な情報の処理ではうまく行かない，社会科学ではどうやっていますか」という質問をよく受けます．例えば，人工知能の初歩的な機械が自動翻訳機です．日本語を英語に直す場合に「昨日は骨が折れた」という文章が出てくるとします．従来のやり方だと不確実性を一番減らす方法を採用することになります．一般に使われる「骨が折れた」は，確率90％で「苦労した」の意味に使われ，あとの10％が実際に「骨が折れた」という意味で使われるとすると，当然90％の確率で苦労したという意味に使われるから，苦労したと訳すのが一般的であります．

ところが，全体の文章を読んでみるとスキーに行った話で，乱暴な滑り方をして，実際に骨が折れたという意味で使われているケースがあります．これを識別するのが大変なのです．文脈といいますか，文章が並んでいるわけですから，その文脈のなかで処理しなければならない．全体のなかにおかれたある一文章を，全体との関連のなかで処理しなければなりません．これは典型的な意味処理の問題です．従来の理工系の情報概念では先になかなか進まない状況です．

(2) コミュニケーションとは何か

それから，コミュニケーションは従来の考え方でいくと，ノイズを最小にしてメッセージを相手側に伝えることないし，意志決定に役立つ手段としての情報を伝達することになります．しかし，先程のインフォーメーションの言葉と同じように捉え直してみると，違ったコミュニケーション観になります．コミュニケーションとはコミュニティの動名詞形ですから，コミュニティないし，コミューンになること，つまり共同的になることを意味します．違いを取り込み，相手と心を通わせることで共同的になること．これが意味情報からする情報のコミュニケーションになる．

これまで，我々は機能的思考に慣らさせてきたので，機能のシンボルを数多く持っています．機能にまつわる言葉というのは，最適性，性能，品質，利便性，制御，管理，目標達成，合理性，効率など数多くあります．大学院のゼミで機能の言葉をタブーにして，例

えば企業が今後どういう活動をしていけばいいかを議論せよというテーマを与えたことがあります．使ってはいけない言葉をリストアップしましてね．すると15分くらいは沈黙が続く．言葉が出てこない．世の中から切り取ってくるリアリティのうち機能的なそれを禁止したら，何と言葉が出ないことか．学生はまだ機能汚染の度合が低いから，そのうちに言葉がぽつりぽつりと出てきます．例えば，フィーリング，遊び性，ファンタジー，アドベンチャー，自己実現，自己表現などが出てくる．これらは風俗用語で学術用語ではありません．たぶん，それらは象徴的な意味に関連した言葉でしょう．そういう言葉作りがまずなされなければならないと思います．

要するに，意味を語るとは，機能のように目標達成のために効率よくやるという発想ではないことです．目標がなければ管理のしようもないし，制御のしようもない．よく目標喪失すると何をしていいかわからなくなると言われますが，目標が定まらない状態のなかで，しっかりと活動できることこそ本当に大事なことだと思います．そうすることが新しいリアリティを切り取ることであり，企業活動の文脈で言えば新しい付加価値を取り出すこと，情報を創造することです．こういう動きはコントロールを前提にしないシステムを必要としています．

V．アンチ・コントロールのシステム

近代はコントロール・システムを普及させてきましたが，これからはそれに代わってアンチ・コントロールのシステムが必要になると思います．それは何かというとサポート・システムであります．支援はこれまでもありましたが，成果や見返りを前提にした支援が多かった．管理は必要悪であり，支援がまず先というシステムが求められるようになると思います．何が付加価値かは事前にはわかっていないから，サポートするしかないのです．管理のため，コントロールのためのシステムは随分整備されていますが，サポートのためのシステムはどういうものなのかは難しいテーマです．情報科学ではDSS（decision support system）の設計が流行っていますが，サポート・システムとは，情報論的に言えば，情報データベースとりわけ知識データーベースを活用するモデルを用意して，これに自由にアクセスできるようにすることです．

(1) ネットワークを超えて

そこへ行くまでに，どのように考えたらいいかということですが，情報社会論と平行してネットワーク社会論が社会的な関心を呼び，新しい社会の編成原理だという議論がなされております．例えば今までは，社会編成の原理としてマーケット（市場）やハイアラーキー（組織）があったのだけれども，ともに問題点を抱えている．その問題点を克服するために，ネットワークが新たな社会編成の原理として注目されています．これから21世紀にかけて情報化がさらに進むから，情報ネットワーク社会になるのは当然だと思います．それを避けるわけにいかないし，現状の豊かさを維持するためにも必要なことです．しかし，ネットワークが新たな社会の編成原理だということには疑問を持っております．

現在，3つのタイプのネットワークがあるように思います．もっとも進んでいるのが情報通信のためのハードウェア的なネットワークです．これは社会の効率化，合理化を進めるインフラストラクチャーです．2番目が，ネットワーク組織です．パソコンによる社内通信ネットワークとか親会社と子会社を結ぶLANなどがありますが，これはソフトウェア的なネットワークです．3番目が，新しい社会運動のあり方として出てきたネットワーキングで，いわばヒューマンウェア的なネットワークです．

2番目のネットワーク組織は官僚制の不備を補うためのものです．縦割の情報ばかりでは風通しが悪く意志決定もスムーズにいかないからその不備を補完しようとするもので，官僚制に代わるものではありません．

3番目のネットワーキングは，意欲として新しい社会編成の原理を目指しています．リップナックとスタンプスが本を出しましたが，読んだかぎりでは，昔の市民運動・社会運動の議論とどこが違うのかわかりません．今まで組織化しづらかった運動を効率よくやろうというふうにしか読めない．自由で自立した個人が，手に手をとって結びつきましょうという議論で，何か新しい論理を持っているとは思えない．「連帯」や「組織化」や「運動」という言葉を「ネットワーキング」という言葉に置き換えて，かつての住民運動論・社会運動論を読まれたらいいと思いますが，中味は同じことです．

ネットワーキングという言葉は流行語になっていて，何となくプラス・イメージの言葉になっています．組織化や運動や連帯という重たい言葉ではなくて，「カルチャー」っぽい言葉になっている．軽薄短小化の流れに乗った言葉だろうと思います．市民運動も住民運動も軽薄短小化して「カルチャー」っぽくなって，気軽に皆が参加できることはいいことだと思います．物々しくイデオロギー・理念を掲げて体制に反抗することにはついていけなくなっていますから．そういう意味では意義は大きいと思う．ただ，ネットワーキングで社会を編成するというが，どうやってそれが可能かははっきりしない．通産省がパソコン通信によるコミュニティ作りの実験をやった結果があるのですが，最もうまくいくのが30人です．200人を超えるとオペレーターが必要になる．調停をする人が必要になります．1,000人を超えると全体を取り仕切る人が必要になる．1万人を超えると権力者が出てこないとまとまらない．こうした結果は，昔からある集団論・組織論とあまり変らないことです．

(2)　リゾーミック・システムへ

ネットワークは社会統合の現代版だと私は思っています．現在，社会編成の原理としてネットワーク，マーケット，ハイアラーキーが出たことになります．しかし，これだけでは社会の動態を考察するには足りない．私はもう1つリゾームというものが必要ではないかと考えています．金子郁容さんのネットワーク論を読むと，リゾーム化したネットワークについて述べているように私は思います．ネットワークを流動する多様体と表現されていますから．

リゾームはあらかじめ決められた目標を持ちません．リゾームというのは，ポスト構造主義者のドゥルーズとガタリが考えた概念ですが，私は「自在結合の原理」を持ったシステムだと考えることにしています．この原理は，ある要素がどの要素と結合するかは自由(任意)でよいが，どれかの要素とは必ず結合しなければならないという原理で，偶然性と必然性を同時に備えた結合原理です．

どれと結合するかは恣意的だが，必ずどれかとは結合しなければならない．人間の身体に張り巡らされている神経網は大体この原理で作られている．神経網を構成する要素であるシナプスの結合すべてを，遺伝子情報で指令することなどとても不可能なことです．遺伝子はそれほど多くの情報量を持てません．各シナプスに対して，どれと結びついてもいいが必ずどれかと結合せよという単純な原理を指令するだけで，おおむね神経網を体全体に張り巡らすことができる．もちろんこれだけでは単純すぎて十分ではないから，追加情報によってコントロールしているのですが．社会もこのシナプス結合に近い原理で，組み立てられるのではないかと思います．友達を作る場合に，だれと友達になってもいいわけ

です．縦割の官僚的な結合が不必要だと言いたいのではありません．しかし，そればかりでは社会は硬直状態に陥る．自在結合に基づいたリゾーミックなシステムが，意味のメカニズムに基づいたシステムであると私は思っています．こういうシステムをどう設計するかが大事です．

私は理工系の大学に在籍しているものですから，アンチ・コントロールのシステムを作ってみせよ，と工学系の先生からよく言われます．作れと言われてもそう簡単にできるものではありません．現在，いろいろ事例研究をしているところです．例えば，バス路線の変遷はリゾーミックな動きをします．バス会社は，しばしば路線を延ばしたり，廃止したりします．また，電子回路をリゾーム回路にしたらどうかとも考えています．回路のどこかが故障したら，自分で回路を付け直して補正するものです．ある回線が切れたら，他の所に付け直して自己組織する回路を設計をすれば，それのほうが実は効率性もあがるような気がするのです．効率性のためにやるのではないのですが．

こうしたリゾーミックな動きと結合を，社会システムに組み込む必要があると考えます．こうした発想はサポート・システムの原理になると思うのです．これからは，政治も国民生活のためのサポート・システムに変える必要があると思います．行政も今まで管理ばかりやってきましたが，今後はサポート・システムに変態しなければ国民からそっぽを向かれるでしょう．

現在，単に情報化が進むというだけではなくて，新しい生活のコードができつつあると思います．新しい秩序ができる際には，まずセマンティクス（意味）のレベルで起きる．それがのちに構造化され，機能化される．意味空間で新しい試みがなされて，それが既存の仕組みにリフレクトして問い直され，新しい機能なり構造なりに形を整える．これが自然界から区別された人間界の自己組織性だと思うのです．

今田講演に対するコメントと質疑

好井：おそらく，私が聞きたい問いに対しては，この後で金子さんが話してくれるのではないかと思うのですけれども，残念ながらそれまで居れませんので，今田さんが言われたことに即して聞きたいと思います．近代性の脱構築ということで，今の報告のなかではあえて避けられたのかも知れませんが，人間観の問題があると思います．人間というものがどういう在り方をしていけばいいのかといったようなところを言わない限り，仮に意味情報がリゾーム的になっている度合を言ったとしても見えてこないものがあるのではないかということです．最終的には人間観をどのように考えているかという点を聞きたいのですが，その前に二つほどあります．

まず一つはネットワーク理論のなかで連帯を組織化と言い換えれば，ほとんど変わりがないのではないかということを言われましたが，そうすると具体的ないろいろな地域に根ざした運動のなかで共に生きる意味での共生，あるいは共に働くということでもいいし，共に動くということでもいいということで共

働(動)，これは運動のなかでは結構シンボル化された言葉として使われていて，そういった共に生きるとか共に動いて訴えていくという言葉についてはどのような解釈をされるのかということです．二つ目には，意味を捉えていくときに，記号論的な発想で意味を捉えていくのもいいのですが，人間が具体的にいろいろな生活のなかで意味を生成していく，その生成の仕方を見なければならない，そういったところで人間の関係性の中で意味をどのように捉えていくのか．昨日の研究会でおこなっていた議論で，エスノグラフィックな問題と意味というものをどう捉えていくのかということに関連しますが，それで僕が勉強してきたようなエスノメソドロジーでのものの捉え方というと，シークェンス(sequence)，つながりですね．つまり先ほど話されたなかで，骨を折るという言葉の翻訳の例が出ましたが，確率的にみて決めてしまうとまずいことが起きるという問題がありますね．行為の連鎖の中で意味が形成されていく過程．人間の具体的な活動が具体的な意味を生み出していく，あるいはシークェンスの中で新しい意味を作り，別の意味を消し去っていく，そういった発想をどう社会論の中に組み込んでいくのかというところが気になりまして，そういった問題というのは結局，最初に言った人間観の問題になると思いますけど，そのあたりを質問したいと思います．

今田：なかなか難しい問題です．ネットワークについて共生ということがよく言われますが，これは本来，生物学の学術用語でsymbiosisと言います．片方だけが利益を得る場合の片利共生と，双方とも利益を得る共利共生があります．例えば，ヤドカリとイソギンチャクの例は片利共生です．一般的に共生と言われる場合には共利共生を自明の前提として使われているんですね．共利共生というのは互酬的なことです．ネットワーク論は，お互いに手を取り合って助け合ってやっていきましょうということで互酬性を目指しています．一種の統合原理といったのはそういう意味です．ただ，これが有効に働くのはそう大規模な社会ではないと思います．小さな，せいぜい数100名くらいの部族社会でないと，その論理はうまくいかない．しかし，それを超えるとなかなか難しいと思います．それを超えたところは自動情報処理と情報ネットワークによる効率化でやっていくことになるでしょう．共生のためのネットワークを悪いといっているのではありません．それはそれでいいのですが，しかし，それで社会を全部覆い尽くすというのはまず無理だということです．いろいろなネットワークが重層的につながりあえばよいと言われるかもしれませんが，それだと昔からある集団と集団のつながりと変らなくなる．そういうわけで，ネットワークを限定された範囲内で，新しい社会編成の原理として使うべきだと思います．

2つ目の意味の生成についてですけれども，これが難しい．人間関係のなかで意味が生成されるということ以前に，ひとりの人間が新しい意味を生成することが実はまだあまりわかっていないんですね．新しい差異を世界から切り取ってくる．切り取ってきた差異を既存の意味のシステムのなかに割り込ませるわけですが，下手に割り込ませたら関係づけ出来なくなってはじき出されてしまう．どこかの関係を切断して自分のほうにつないで，初めて新しい意味が発生するのだと思います．

色の学習を想起すればいい．子供が色を覚えるのは大変な作業です．赤とそれ以外の区別，次に赤と区別された白を覚えるのに，赤と白の関係を教えないと覚えられないんです．混ぜるとピンクになるとか，赤が危険だとか白は平和だとかいろいろシンボルをくっつけないとその関係がつかめない．そして黒やそれ以外の色を増やしていく．意味が充実していくというのはそういうことだと思いま

す．人間関係のなかでそういったことをやるとなると，それが相互的になるわけです．違いをお互いに取り込んでコミュニケートするなかで，お互いそれぞれの考えは違うのだけれども，お互いの違いをそのまま言い張っていたのではコミュニティ，共同的になれないわけですから，ある程度，考えを加工しますよね．お互いの違いを取り込みながら．

ハーバーマスはこの過程を相互了解というんだけれども，私はそこまではまだ言い切ってしまわないで保留しています．私はシンボリックな闘争をやるのではないかと思っているんですけど，それをやってあるところで収める．それぞれが持っていた違いとは別の第3の新しい違いを作って収めるのが新しい意味形成だと思いますが，そのメカニズムが難しい．それをプロセス論で解明しなければならないということで，かなり事例研究をやらないとわかりにくいと思うのです．そういう意味ではエスノメソドロジーはそういうことを随分やっておられるわけですから，参考にさせていただきたいと思います．

最後の人間観ですが，これは壮大なテーマです．ただポストモダン状況を考えればわかると思うのですが，これからも効率的・合理的に奮闘・努力して「どうなるの？」という思いが人々の脳裏をかすめるようになっています．人々は現在，一所懸命努力して会社の部長などの管理職になったからどうなる，という虚しさに襲われつつあります．まだ企業戦士で頑張っている人もいっぱいいますけど，もっと社会とつながりのある活動をもてないものかと思う人も増えています．結局，何をしたいかと本人が考えることから新しい人間観が出来ると思うのです．機能の論理に従って効率よく成果をあげ，自分のスティタスをあげるということにはあまり動機づけられなくなりつつあり，それが全てだと思い込んできた自分に対して疑問を感じ始めつつあるのではないでしょうか．人生に付加価値を付けたい，自分の生活にも付加価値を付けたい，商品に付加価値を付けるのではなくて自分の人生に付加価値を付ける．そういう発想に変わってきている．そういうことから言えば，近代社会によって解体された意味空間を回復させようとする試みが芽生えつつあります．だからといって中世の意味空間じゃだめなんですね．でも，とりあえず近代によって駆逐される以前の意味空間へのノスタルジーを抱くことになる．それがレトロブームですよね．江戸ブームとか．しかし，それは本物ではない．近代という洗礼を経たあとの新しい意味空間を作り上げられるまで，皆苦労するのだろうと思うのですが，それが出来たときに新しい人間観も形成されるのではないかと思っております．

好井：今のお話を伺っていて，ぼくの三つ目の問い方がまずかったかなと思ったんですけれども，聞きたかったことは次のようなことです．共生の問題に触れられたときに互酬性の話をされた．さらに共生のネットワークというものが規模の問題だと．小規模でなければならないというのはそうだろうと思います．ぼくが聞きたかったのは互酬性の中味です．いろいろなところで――ボランティアの話はこれから出ると思いますが――かかわりというのがある．かかわっている人が必ず言うことが一つある．「それはなんですか？」と聞くと「私はかかわって得をした」と言います．「どういう得ですか？」と聞くと「別に金が儲かるとかそういったものではないけれども，自分の関係の，うまく説明は出来ないけれども，広がりとか，……とか」というように抽象的な言い方で言うと世界が広がるとか，それこそ流動的になるという，そうしたものでの得みたいな事を必ず言われるんですね．そうするとその互酬性の中味が，もう少しきちんと検討されていくといいのではないかということです．

もう一つは，今日話を聞いていておもしろ

いと思ったのは，情報という言葉の意味を今田さんが言った差異を取り込んで会話をするというような情報の意味ということなのですが，そういった形でいくと人間観という問い方ではなく，今田さんが今，社会論を構築しようとしているときに具体的に自分のなかで前提としてしまっているような人間イメージがちょっと狭いのではないかと思います．均質的で平板であるというイメージを受けざるを得ないのです．さまざまなところで小規模ではあれ今までの社会を変えていく，そういった何かを持ったような人間がいることは確かで，その人間の営みが小規模なところからどうしたら広がっていけるかという点で苦悩している面もあるんですね．それを人間の具体的なつながりでの苦悩ではなくて，互酬性の中味だけを取り出しても情報として広げていって，その心地よさを広げられないかという感じがある．蝶々が心地よさでメスに寄っていったはいいが，飛びついてしまうとちょっとしんどいかなというようなリアリティ，それを含んだような理論というものは作れないのか．すでに社会が先行してしまって，さまざまな違いを持った人間が違いと顔をあわせながら自分の人間イメージまでを変革していくような営みが，地域，具体的な生活の場で行なわれつつあるということ，そう考えていくと人間のイメージがもう少し広がっていくとおもしろくなるのではと思いました．

今田：私は，小さなグループから輪を広げていって社会にまで至るというのを，どうやったら出来るかということを知りたいのです．小さないろいろな活動団体が，実際にどうやってやっていくかという事も重要なテーマですが，それで社会がうまく作れるかというと，無理だろうと思う．ボランティアは大変意義あることだし重要なことでもあります．そういう形で社会とつながりのある活動が今まで日本ではあまりにも些末なこととみなされてきた．それを破って社会とつながりのある活動も重要な価値があるということを啓蒙していくことは大事なことです．ただ，それだけで社会が成り立つかというと必ずしもそうはいきません．食い扶持を作らなければならないし，経済のパフォーマンスもあげなければならないでしょう．そういう中でボランティアや共生の発想が機能の論理によっておさえこまれないようにするためのロジックをきちんと作る，そこをやりたいということです．まだきちんとできていないのですが，それをリゾーミックなシステムに求めたいのです．対抗とか反抗とは異なり，リゾームというのは管理に肩透かしをくらわせ，問題ずらしをし，あたふたさせるようなロジックです．そういうシステムをうまく作り上げないと，せっかくいい試みが出てきても管理にからめとられてしまって，ダメになってしまう．だからリゾーム的な支援システムを管理と対等な位置にまで鍛え上げて，その中でいろいろやっていければいいと思います．

それから，人間イメージの狭さについて答えておきます．私が今持っている人間イメージというのは，まだ人間イメージを本格的に考えた事がないのですが，少なくとも情報とコミュニケーションを先に述べたように考えていますから，まず違いに耐えられる精神構造を持っている人間像が基本なんです．違いに耐える精神構造がなければならない．これがないと機能主義的な人間像になります．

意味の生成や意味のメカニズムを考えるときには違いがあることが大前提になる．すぐ不確実性の原因だとみなしてこれを処理しようとするタイプの人間はこれまでのタイプで，新しい人間は違いに耐えて，まずそれを認める．その上で違いを削らずにうまく編集することで共同的になれる仕組みを目指す人間です．日本の国際社会における役割にもそれが必要です．東洋と西洋という違う二つの文明を１世紀かけて編集して第３の文明を作

ろうとしてきたのだと考えることによって日本の立場を世界にきちんと位置付けたらいい.進んだ西洋,遅れた日本というコンプレックスを持ったままやるのは危ないのです．そのような発想を持つと今度は俺の番だというように，またヘゲモニーの論理でやりかねない．そうではなくて，日本は西洋と東洋の文明の違いをこれまでうまく自分なりに編集してきたと考えるべきです．実績を持っているからそれをもとに日本は，異民族，異文明が共生しあえる――そういうところでは「共生」を使っていいと思いますが――新しいハイパー文明を提示する役割を担うのだと自覚する必要があると思います．

好井：人間観が狭いといったのは否定的な意味で使ったのではありません．僕自身がいろいろ動いているなかで確信していることで言いますと，小規模ななかでも変革の契機をどのように生成するかを，現場の人は非常に苦悩しているわけです．ほとんどやれない状況になってきている．そうすると，いま今田さんが言われたような，新しいシステムをどう構想し得るかということにはすごく期待していて，ぼくも共感するのは啓蒙とか啓発とかの形のシステムでは,絶対ダメだと思います．先に比喩的に甘いかおりということで言いましたが,思わずそちらにのってしまうような,だましのテクニックでも何でもいいのですけれどもそういった感じのシステムを考えたい，そう意味で期待しております．

井上：今田先生のレジュメの2ページ目に，モダンの理性という言葉がありますが，その中味としてはどういうものを想定しているかということを伺いたいんですけれども．

今田：デカルト流の二元論に基づいて，理路整然と処理するという理性，近代科学の典型的な理性のことです．この理性は自己言及性を論理の体系から排除しています．もう少し広い社会思想のレベルにまで広げれば，進歩的な啓蒙思想，とりわけ社会を計画し，管理することによって望ましい方向に変えていけるというコントロール思想を含めてモダンの理性と呼んでいます．

井上：先ほど述べた，違いや自分と違う存在に対して耐えることはモダンの理性では出来ないということですか．

今田：個人的にはいくらでもできると思います．意味の発想も機能の発想も古典古代からあると思います．しかし，社会の装置として，社会の仕組みとして出来るかどうかというところで私は考えています．違いに耐える精神構造というのは井上さんの論文を読んで考え付いたことでもあるのです．ウェーバーは不確実性に耐えることを超人論の中で言っていると井上さんは論文で書かれています．ニーチェは不確実性の中に身を置いて不確実性に耐え，思考するということこそ超人たる資格があると言いました．不確実性に耐えることも違いに耐えることも同じだと思うのです．近代社会は，違いに耐えることをマクロな社会のレベルに組み込む作業をやってこなかった．ニーチェやウェーバーは超人はそれができるということを述べたわけですが，現実の社会は合理化過程をどんどん進めていくと言っています．

異質なものに対する排除の論理が民族問題になってあらわれていると思うのです．冷戦構造のなかで民族のアイデンティティとか民族固有の意味空間は，エゴイズムとして抑え込まれてきました．ところが，冷戦が終わったとたん，民族主義の嵐が突如吹き出して，とどまるところを知らない状態になっている．1990年代は文化大分裂時代になるかもしれないくらい民族問題がどんどん吹き出しています．

近代は理念としては相違を尊重していますが，実際問題はうまくやれなかった．近代は違いや固有の意味空間を扱うことを不得手としてきました．覇権の論理で全部抑え込んでしまった．これからしばらく，民族固有のセ

マンティクスとかアイデンティティの問題がどんどん吹き出して，しばらく収拾がつかない状態が続くでしょう．しかし，その中で新しい国際関係の在り方，国際的な共存の在り方を考えないといけないだろうと思います．もう一度覇権の論理でやるのは無理です．民族主義の論理で世界をまとめるのも無理です．第3の新しいまとめ方を考えるしかない．そのために意味のメカニズムをしっかり考え，意味処理の方法を考えなければならないと思います．

狩野：いまおっしゃった不確実性に耐えるというのはニーチェですか．

今田：ニーチェです．そういう言葉ではっきり言ったかどうかはわかりませんが．

井上：最初はウェーバーでなくてニーチェですね．ウェーバーも言っていますけれど．ウェーバーがニーチェの問題を受け止めたことの最初の現れは，病気後でして1907年に書かれた『古代農業事情』の第三版と言われています．

今田：ウェーバーはリフレクションということも言っているらしいですね．

井上：今田先生のリフレクションそのものとなるのかどうかはよくわかりませんが，近しいと思われるものとしてリッターリッヒカイトという概念があります．日本語では騎士的精神とか武士の魂となる言葉です．武士の誇り高い高貴な態度であり，精神的に強い内省を含んでいますね．これは明らかにニーチェの問題を受け止めたものです．

佐藤：私は物理学をやっているので今の話はあまり馴染みがないので逆の面から聞きたいのですが．逆の面というのはテクノロジーに触れるなかで，バイオの技術が今後のリゾームな社会システムを支える技術の基本になると言われたように思うのですが，それでは人間の功利的な近代の精神というのが，どのようなテクノロジーに支えられたのかということなんです．つまりそのテクノロジーのうえにどういう社会や社会観，社会構造が構築されたかというように考えていくと，バイオのテクノロジーや情報等の現代のテクノロジーがリゾームなシステム，サポートシステム，違いを許容し得るような社会構造を支える技術と期待し得るかどうか知りたいのです．近代の効率を追求しなければならない社会は，それを支えていたテクノロジーの限界の反映でもあった．そうすると，これからの新しい技術がもっと多様なものを許容し得る，他人の利害に食い込まないような社会や経済を保証し得るようなものなのかという点です．果たしてそのような技術があるのかという疑問を持つのです．地球の有限性が環境問題との関連で重要だと言われていますが，新しいテクノロジーがその障害を超えてさらに豊かさを求める人間が互いに利害を許容しあえるような地球環境の維持を可能にするかどうか．そういう点で，どう見ておられるのかを伺いたいのですけれども．

今田：バイオテクノロジーのことについて深く研究したわけではないのですが，第1に言えることは機械文明とは基本的に違っているということです．地球の生態系という閉じたサイクルのなかで生命体は生きていますから，生態系で処理できない，分解できないものは作らないと思うのです．これまで，地球の生態系は何十億年にも及ぶ長い時間をかけてR&Dを試みてきたから，自分のメカニズムによって分解不可能なものは作ってないんですね．ところが，人間は，そういうものを作り出してしまったわけです．自然の生態系では分解できないようなフロンガスを作り出してしまった．プラスティックも分解できません．それが地球環境の悪化を招いているという反省が出ている．バイオになれば自分自身のメカニズムに基づいて分解できるものを作るだろうと思います．それはちょっとオプティミスティックですが．実際はそうは行かない．変な生物体を作ってしまって，生態系

の循環に収まらずに，人間を駆逐する可能性もでてくる.だからそれはサポートではなく，人間を壊滅させることにもなりかねない危険性もあります．しかし，少なくとも生態系の循環，閉じたサイクルのなかで処理できるようなバイオ機械を作れば，環境問題にとってはかなりいいことだと思います．ちょっと楽観的すぎますが.

それから第2に，バイオテクノロジーは人間の脳細胞機能を拡張させることです．かつてコロンブスが新大陸を発見したように，新しい文明には新しいフロンティアが必要です．それはもう陸地ではあり得ない．情報によって作られるハイパー・リアリティの世界です．そこに入り込むためには，バイオテクノロジーでセンサーその他をすべて作り上げる必要がある．バーチャル・リアリティの世界に近いものです．新しいリアリティの新大陸はそこしかないと思うのです.

従来の情報と物質の関係は制御と被制御の関係にありました．情報によって物質過程を制御していますから．そうすると，情報の動きを見れば物質の動きがわかり，物質の動きを見れば情報の動きがわかることになります．これからは，物質的なプロセスとは非対称な情報の大陸がフロンティアとなると思います.そういう方向に社会は動きつつあるが，そこに入り込むためのテクノロジーとしてバイオテクノロジーは重要だろうと思います.

それから，第3に権力論の問題を考える必要があります．私はこれからはビューロクラートに代ってセミオクラートが登場する，つまり記号を操る人がかなりの力を持つようになると考えます．コピーライターはそのはしりで，一種のセミオクラートです．物質的には何も作ってないけれども，いいコピーを作ってモノを売る．記号レベルの動機を満足させることによって物質の要求を引き起こさせるという，手の込んだ記号操作です.

セマンティックをうまく操る人が権力を持つようになる．その中で違う記号コードで生きる運動が起こるでしょう．反対運動をして体制批判をするのではなく，自分たちは別のコードで生きる人たちが登場するようになる．フェミニズムはそうだと思うのです．自分たちで生きるためのコードを作って，それを認めないと何だかやばいなという雰囲気を作り，男性をそれに乗せてしまう.

佐藤：近代の定義は，効率優先であり，その中で文明が作られてきた．そのなかに権力による上からの抑圧というのがあった．バイオなどのテクノロジーに代表される新しい生産能力が豊かさなどを保証するなかで，効率性を追求しなくなるというか，効率を追求して行くことも可能なようになったということですか．昔は技術レベルというのは（私の理解では）効率優先という軸で統一しなければ社会は維持できなかった．それが新しい技術レベル，情報の技術のレベルでは，いろいろな人の多様な価値観とか人間観とかを許容するようになっているというわけですね．そのへんの見通しはどうなっているのか，新しい技術が，たとえば環境問題などの地球の有限性を超えて個々の人間の多様性をかなりの程度認めあうような経済・技術基盤になるのかどうかという点を聞きたいのですが.

今田：そういう方向に行くしか，行く所がないのではと私は思っているんです.

佐藤：方向性は理解できるのです．私も大賛成なのですが．そこを本当に保証し得るのかな，ということが気になるわけです.

狩野：社会学者は，そういうことを保証できないですね.能力的にそうならざるをえない．それ自体は決して間違いではないし，また正しいという保証も出来ない．その議論は明日に任せたいと思います.

伊藤：以前から今田先生のお仕事に注目しているわけですが，共感と同時に抜きがたい違和感というか疑問があって，ぜひ一度お聞きしたいと思っておりました．共感という面か

ら言うと，近代の脱構築という問題，それから，ハーバーマス，ルーマンから出てきている論点，それからどのように社会の編成モデルを考えられるかということ，そういう問題の提起に関しては共感をもって先生の仕事を検討させていただきました．ただ，今日の話を聞いて3点ほど質問をしたいと思います．

一つは，今田先生の切り口はモダンの脱構築という形で提起はされているのですけれども，実際近代そのものを問題にされているのかどうかということです．それが疑問の第一です．どうも見方が産業社会学からの近代の捉え方という視点が強すぎて，問題の近代の脱構築といわれている内容を一部しか捉え切れていないのではないかという印象があるのです．例えば教育システムそのものも近代のシステムの産物ですし，医療システムに関しても近代固有のシステムですし，福祉の領域でもそうです．そうした領域のなかで近代に培われてきた制度そのものが揺らいできていて，好井先生が先ほどおっしゃったのはそこに結びつくと思うのですが，医師と患者の関係，その関係性をセットしてきた関係のパターンを組織してきた構造そのものが人々のなかで疑問とされてきている．教師と学生の関係もまったく同じですね．僕は近代の脱構築を考えるときにフーコーが言っているように，近代で培われてきた言説編成の問題というのが非常に大きくて，相互主観的に構成されてきた情報空間，これそのものが問題になっているのではないかと思うんです．今田先生の場合には，その問題が抜けていて近代の脱構築の課題設定が一面的ではないかという印象があります．

第二点目として，近代に培われてきた言説編成の問題は，権力の問題と大きくかかわってきているわけですね．それはよく政治学でいわれてきたような，上からの権力概念ではなく，我々の関係そのものに内在する権力をどう脱構築するか，あるいは可視化していくかということこそが，いま問題になっているのではないかと思います．そのように考えると今田先生が，意味ということを言われていますが，意味そのものを権力問題とリンクさせて考えていく視点が先生には欠落しているようにみえます．先ほど先生は権力にも触れられましたが，書かれたものを見るとその問題が抜けているというところに違和感があって仕方がないのです．

今田：まだ理論が出来ていないから書けないんです．

伊藤：ですから，権力問題と兼ね合わせたところの意味の問題を検討しないかぎり，意味が大事ですと言っているだけでは不十分なのです．僕も意味を機能で考えるのではなく，機能を意味で考えるという発想の逆転はすごく大事だと思います．社会学を変えていく一つの視点であることには間違いはない．ただそう言っただけでは，非常に浮わついた意味概念だけで終わってしまうのではないか．ルーマンとハーバーマスが意味と情報のところで議論をたたきあわせて，決着がついていない，一番大事な問題だろうと思うのです．

第三点目に，近代で培われてきた言説の編成をどう組み替えていくかという問題です．どのように編成替えしていくかという点に関わっては，先生は先ほどシンボリックなコードの変換ということをおっしゃいましたが，ポイントになるのはモダンの理性の問題です．主一客の二分法で考えていくという発想そのものが近代固有の言説空間，情報空間であって，これが自然と人間との関係にしても，フーコーが問題にした人間と人間の関係にしても，主体と客体という発想で一方通行の情報，一方通行のアクションだけで考えている，そういう近代の情報空間をどう組み替えていくかということだろうと思うんです．

僕は，先生の言葉を借用して言えば，自己言及的な知に変わる必要がある，自己言及的な知が単に知としてではなくて社会的制度化

していくためにこれをどうするかということが非常に大きな課題ではないかと思っています．その時に自己言及的な知の制度化の形態をリゾームと言おうがネットワークと言おうが，僕はネーミングにはこだわらないのですが，主体―客体ではなく，自分が作用主体であると同時に作用される客体でもある，つまりサイバネティクス的な循環回路のなかに自分が入っているのだという構造を社会的にどれだけ作り出していけるかということだと思うんです．それは，金子先生が「かかわり」とかボランティアという形で言っている，最も大事な点なのではないかなと思うんですね．今田先生が，ネットワーク論に対して非常に否定的でしたが，僕はそうではなくて，ネットワークの背景にあるのはそういう循環構造をどう作っていくかということがネットワーク論じゃないかと考えるわけです．そこをお聞きしたい．

今田：第１点目に関しては，教育制度とか医療制度，福祉制度を扱っていないから不十分だと言われるのはちょっと不本意なんですね．僕は今，メタセオリーのレベルで話をしているのです．だから，近代とはこのように考えるべきだという反論を出していただいて，僕の議論では近代は捉えられないと言ってもらわないと議論しようがないのです．御指摘は十分わかりますが，議論の土俵としてはレベルが違うところかなと思います．

フーコーの近代批判に関しては僕は読まないようにしているんです．フーコーの言説ははまると抜けられない(笑)．特定の観点からだけ読めば問題ないのでしょうが，フーコーを読みこなそうとするとはまってしまって，フーコー・オタクになるのではないかという気がします．

フーコーの言説戦略は，まさに近代によって培われた言説編成のなかに権力の構造を暴くことです．それは大事なことだろうと思うのですけれども，じゃあフーコーが今いたら，現在の高度情報社会の権力構造をどう暴くかが問題だと思うのです．そこはむしろ伊藤さんにお聞きしたいくらいで……．

私は，シンボリックな意味にまつわるコードとシンボリックな効率の辺で権力にかかわってくるのだろうと思っています．権力をだれが握って，どういう装置で作り上げるかということは，情報ネットワーク化に関わってきます．そういう意味で無反省に情報ネットワークを礼讃すべきではないと思います．ネットワーキングはそういうことを目指していないことはわかりますが，誤解を与えるような言葉を使わない方がいいという意味で，僕はあまり使いたくないわけです．ネットワーク化は情報の効率化・合理化の手段に限定する．アメリカではネットワークという言葉は，コネとか地縁，血縁とかという意味でマイナスイメージで使われることが多く，決してポジティブな意味で使われるわけではない．それは定義の問題だからかまわないのですが，へたにごちゃ混ぜに使うことによって幻想が出来てしまうことのほうが恐ろしいということです．

それから，意味概念が少し浮わつき気味ではないか，ということですが，まさにそうだと思います．浮わついているというよりも，社会的な意味論をどう作るかということをしっかりやらなければなりません．ハーバーマスとルーマンのシステム論論争を読めばわかりますが，ルーマンは１回も意味を定義していない．外延ばかりあれこれ言っているだけです．ハーバーマスは相互了解に基づいた意味形成を問題にしていますが，どちらもあまり参考にならないのです．あれだけ有能な社会学者がやっても無理なのだから，社会科学から離れて意味概念を研究した方が，情報科学とか人工知能だとか，そっちでやったほうが生産的かな，と最近思っているんです．その消化率が良くないものですから浮わついたハイパー・リアリティとかバーチャル・リ

アリティとか言う言葉がつい出てしまうのです．しかし，浮わつこうが何しようが，メカニズムがわからないと話にならない．そのメカニズムをなんとか解明したいというのが私の課題です．

それから，サイバネティックな相互作用ということですけど，サイバネティックスと言う言葉をそのように使うとまずいのですね．サイバネティクスはコントロール理論ですから，目標を定めて，目標達成のために相手から情報を取るだけですから，相互依存的という意味はあまりないのです．関わりが大事だ，関係が大事だ，ということは私の意味の定義からしてもそうです．では，どういう関わりか，関わり方のダイナミクスはどういうことなのかという点が大事です．関わりは作るときとやめるときがある．結合するときと切断するときがある．それがどのような論理で動くかということを明らかにしたい．

自在結合の論理の所で言いましたけど，偶然であることと必然であることを区別しないで，両者を同時に取り込んだ論理．人間社会というのはかなりの部分，こうした論理で出来ています．友人関係，仲間関係がそうです．ただ組織はダメですね．既に役割を与えられてしまいますから．こうした結合がどこまで広がり得るかということに関心があります．ただ，「かかわり」とか「関係づけ」というだけでは，社会は形成されないだろうということは気になります．つまり，「かかわり」というように言ってしまうと，あるものを前提にしてしまいますからね．金子さんは「かかわり」，「関係づけ」というふうにおっしゃってますが，目標や役割を前提にしない「関係づけ」の方法としてどのようなものがあるのかを考えたいということです．

宣伝もかねてですが，近々『混沌の力』という書物を出版する予定です．その中で，リゾーミックなシステムの仕組みを定式化しておりますので，ぜひ読んでいただければと思います．講談社から出ます．この本の中で今日お話したことを含めて，私が考えている21世紀社会像を描いております．伊藤さんが読まれれば，まだまだダメだということになるのでしょうが，その先はこれから頑張れるだけやってみるつもりです．

伊藤：教育とか医療との領域を扱っていないということで疑念を出したのではなくて，そういう領域を扱えないフレームが今田先生の中にあるのではないかという気がして仕方がないのです．

今田：それはどういう意味ですか？

伊藤：つまり，僕は近代の脱構築ということを課題にするのであれば，個々の領域の問題ではなくてきわめて本質的な問題だと思います．個々の領域のなかで起きている問題，そのなかで起きている対抗運動の問題をどう位置付けるかということは単に領域の問題ではなくて，今田先生の理論的フレームワークの根幹にかかわる問題ではないかと思います．僕の問題提起もそのメタ理論のレベルで言ったつもりです．

今田：僕のフレームワークでは教育を扱えないということですか？

伊藤：ええ．

今田：それはない．どう意味でそうなりますか？

伊藤：つまり，……それは明日にとっておくということで……．

今田：懇親会の時にでも．ただ聞いておきたいのは，あなたは近代をどう定義されるかです．

伊藤：さっき言った主一客の二元論図式にたって構成される情報空間によって組織された社会ということです．二元論の情報空間によって制御された社会システムを僕は近代社会と言っています．

今田：それだと私の考えていることと全く矛盾しませんね．

（終了）